



TITLE:

# 民國初期家庭像をめぐる知識青年 の言説：『新青年』『申報』を中心 に

AUTHOR(S):

西川, 眞子

---

CITATION:

西川, 眞子. 民國初期家庭像をめぐる知識青年の言説：『新青年』『申報』を中心に. 東洋史研究 2000, 59(3): 457-489

ISSUE DATE:

2000-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155358>

RIGHT:

# 民國初期家庭像をめぐる知識青年の言説

——『新青年』『申報』を中心に——

西 川 眞 子

はじめに

一 傳統的家庭觀への批判

(一) 「良妻賢母主義」の輸入

(二) 歐米型中流家庭への憧憬

二 女性の勞働と新しい家庭像の模索  
おわりに

はじめに

家庭の持つ一つの役割に變化が訪れようとする——一九二〇年代前後の中國の都市部では、確かにそのような時代を迎えようとしていた。

近代以前、中國の家庭は儒教主義の原則に従い、子は親に従い、妻は夫に服して家庭の形態と秩序を保っていた。それが中華民國の成立によって專制的皇帝政治は廢され、中國は共和政治の時代を迎えると、社會構造もまた大きな變化を遂げるかに見えた。が、それも束の間、袁世凱の斷行しようとした復古的家族主義の擡頭によって、社會は再び前時代に引

き戻されるのではないかという不安と憤りにさらされることになった。特に民主政治樹立の氣概に燃える若い世代にとっては、復古的な家族主義の再來は、到底黙して受け入れられるものではなく、決然と儒教の説く家庭觀への反對を訴えた。

實際には『新青年』の時代より以前、既に清末の知識人の中には、清朝に對する體制批判の延長上に立つ家庭論が生まれていた。家庭を國家の基礎ととらえるが故に、富裕な強國の細胞となり得る、民主主義と合理性を兼ね備えた家庭の實現を主張する一派から、根本的に家庭の存在意義を認めない「家庭不要論」に立つ無政府主義者まで、現行の制度に疑問を抱く者であれば、家庭、及び家族制度について何らかの主張を表さずには済まなかったと言えよう。

一九〇四年九月一〇日附けの『女子世界』第九期に掲載された汪毓眞「婚姻の自由な關係を論ず」<sup>(1)</sup>では、當事者の意志

を無視して、まるで水と油の男女を結びつけたかのような婚姻は、夫婦不和の原因となり、諍いの絶えない家庭に不幸をもたらすだけでは済まず、國勢民力をも損ない、中國の今日の不振の元を築いたと述べる。また履夷「婚姻改良論」<sup>(2)</sup>にお

いても、中國社會で行われている婚姻制度が、いかに個人を不幸にし、ひいては國家の損失を生み出しているかを説くものである。また、無政府主義の立場からは、現在の家庭では年長者がほしいままに子弟の自由を抑壓しているが、元はと言えば、「家庭は人類の生理に従って自然發生したのではなく、私産強權に基づいて出来上がった」<sup>(3)</sup>のであり、「今の家庭は社會の、できもののようなものだ」と説くに至る。漢一「毀家論」<sup>(4)</sup>の言うように、「家が存在するようになってから

人は利己的になり、家が存在するようになってから女性日々男性に羈縻を受けるようになり、家が存在するようになってから無益有害の瑣事が、そここにはびこるようになった」のであり、「家は萬惡の源」に他ならないという結論に達することになる。家庭は歴史の中で生み出された、體制側にとって都合のよい裝置にすぎず、今や有害無益な家庭は消滅するにしくはない、というのである。

このように、傳統的な家庭觀に對する批判そのものは、清末の知識青年の中で既に芽を吹いていた。ただ、辛亥革命以

前に現れた家庭制度批判は、より密接に清朝政權への不満と結び付き、専制國家體制への抗議の手段として機能した。『新青年』の時代に現れた儒教主義的家庭制度への批判も、その契機は辛亥革命以後の現實と袁世凱の復古政策への反發に由來した。しかし從來の家庭觀の羈絆を解き自らの生活基盤としての新しい家庭像を確立する作業は、新興都市に出現した青年知識層にとって、正面から向き合わざるを得ない、より切實な課題となっていた。

こうした事情から新文化運動時期から一九二〇年代半ばにかけて、新聞、雜誌等で盛んに家庭問題が論じられることになる。その發端となった、吳虞による徹底的な儒教主義的家族制批判については、既に小野和子氏の研究に詳しい。<sup>(5)</sup>氏の論著にもいうごとく、傳統的な臣下の君主への忠節の精神は、家庭内で卑屬に向かつて尊長に對する服従を教え込むことから培われるという理論に裏打ちされ、中國の専制主義と家族制度はびつたりと結び附くものと考えられていた。だが、その専制主義が時代遅れの舊物であるという意見が高まるにしたがつて、民國の若者にとって家族主義を強要されるいわれは感じられず、専制主義を打ち壊すためには舊來の家族制度を否定することが不可欠、との結論を得たのであった。

さて、儒教主義的家庭制度に代わる、新しい家庭を築くための指針となつたのは、まず第一に、個人の自由と責任についての觀念であつた。個人が家族主義の犠牲となるのを拒むと同時に、中國の未來に對して、いかに責任を負うかが、多くの青年にとって自らの課題であると意識された。それ故にこそ、多様な人士による家庭論が生み出されることになつたのであるが、その中でも儒教の求めるところに對抗して最も説得力を持つと解されたのは、當時の最新の科學知識に基づく家庭改良論であつた。<sup>(6)</sup>雑誌『新青年』に集う民國青年は「民主と科學」を旗印とし、根據のない陋習を妄信することに警鐘を鳴らしたのであるが、彼らは自ら育む家庭もまた科學知識を礎石とするのを善しとしたのである。

このような道をたどり、新文化運動時期以後、一九二〇年代半ばにかけて、中國の知識青年層の前には、中國が積弊を脱するにはいかなる家庭を築かねばならないか、という問題が浮かび上がることになつた。<sup>(7)</sup>本稿では既に積み上げられて

きた、民國時期の家庭論を踏まえ、この時期に雑誌、新聞等に發表された記述を基に、儒教的家庭觀否定後の中産知識青年層の家庭觀及び理想の家庭像を模索する過程をたどり、彼らの家庭觀にいかなる理想が盛り込まれていたのかを考えてみたい。

## 一 傳統的家族觀への批判

### (一) 「良妻賢母主義」の輸入

新しい時代にふさわしい家庭とは何か、中國の家庭はいかにあるべきか。從來の價值觀によるのみでは、新しい時代に對應した家庭を築くことはできないという認識が靜かに廣まり始めていた。そもそも傳統的な家庭制度を否定する聲は、從來の儒教規範に縛られたままでは中國の積弱を救うことはできないとの危機感に基づいて現れたのであった。劣勢に甘んじる中國の對岸で、歐米を模倣することに成功した日本が發展の道をひた走るのを目の當たりにすれば、日本にならって改革を唱える聲が發せられるのは否めなかつた。<sup>(8)</sup>

こうして日本を中國の家庭制度改良の handbook に選んだ一派が注目したのは、日本の所謂「良妻賢母主義」に基づく家庭觀であつた。<sup>(9)</sup> 新しい家庭の理想像を確立することは個々の家庭だけではなく、近代國家への脱皮を目指す中國という國家自體にとつても必要だと考えられた。そこに着々と列強の仲間入りをしつつある日本の家庭制度への關心が育まれたのであつた。

元來「良妻賢母」は、明治初年の日本に於いて、從來とは違う新しい女性を表す言葉として誕生した。その良妻賢母の新しさがどこに存したかと言えば、まず第一に良妻賢母は、江戸時代以前の社會規範が女性に求めたように一家庭の中で夫に従い家の存續のために貢獻するだけでなく、國家の利益と密接に結び附く點にあつた。主な活動の場を家庭内に限定

して家政を管理し、育児に携わるといふ點で良妻賢母は、儒教の説く女性像と類似の様相を表す。しかし良妻賢母には究極において、自らの夫或いは夫の統率する家ではなく、公權力たる國家に従うことが期待された。

第二に良妻賢母は、中産階級の男性を夫とし、その夫を最も効率の良い形で賃金労働に専念させる爲に登場した。良妻賢母は家庭内の再生産活動に専従する代わりに戸外で労働し賃金を得るといふ行爲からは遠ざけられ、經濟面では夫の收入に頼り、自立できない存在である。しかし良妻賢母の役割は、夫を家政管理の負擔から解き放って戸外の労働に従事させ、妻に収入がない分を補って餘りある賃金を得させるところにあった。良妻賢母は高賃金を得ることを義務づけられた賃金労働者の夫と不可分一對の半身として誕生したのである。そしてもし夫の行爲が國家に損失を招くものであると判断した場合に、良妻賢母は直ちに夫の誤りを諭し、正しい道に立ち戻らせなければならなかった。また同時に母親となつた後は子供の教育に對しても責任を持ち、子供を國家に貢獻する人材に育てることを使命とした。單に一家庭の跡継ぎを生むだけで、公的教育を受けないままに放置された前時代の女性とは大きく役割を異にしたのである。

こうした特色を持つ「良妻賢母主義」は二〇世紀初頭に中國に傳わつた後、<sup>(10)</sup>多様な受け止められ方をした。その中には、本來日本で誕生した當初の良妻賢母主義の意義とは違う理解がなされたものもあった。「良妻賢母」は公的な活動に携わらず家庭内の役割に専念するという、一見儒教主義の説く女性像と類似の特色を持ったことから、體制維持に都合の良い女性像と見なされたのである。また逆に儒教主義反對を言うものからは、「良妻賢母」は封建制の象徴としての攻撃的となった。これらの受け止め方は、良妻賢母主義が中國に傳わつた當初から併存したが、それぞれの意見に立つ人々はそれぞれにどのような議論を展開したのだろうか。

まず、「良妻賢母」を肯定的にとらえ、日本を手本として良妻賢母主義を中國も取り入れるべきだと主張する意見は、日本の場合と同じく國家利益を重んじる立場の人達から現れた。『新青年』（第二卷第六號）掲載の陳錢愛琛「賢母氏と中國前途の關係」は、「賢母」といふ言葉に託して、個々の家庭の枠を超えて國家に貢獻する女性の育成こそが中國に急務

であることを説く。そこでは明らかに従來の中國の家族制度の中の女性像とは區別し、中國を擔う新しい女性像として良妻賢母が語られる。同文の冒頭、筆者は中國の女性が長らく家に閉じ込められ、社會から切り離された朽ち木のような存在として、男子の附屬物の地位しか與えられなかったことを言い、これに對して歐米列強の諸國は、工業化社會の實現と同時に男女平等主義が他の地域に先驅けて發達を遂げた由來を説く。ここに、出遅れた中國としては工業發展を支える科學的精神と、女子にも教育を施して知識水準を高め、國家發展に貢獻させることをしなければ歐米に追いつくことは不可能との議論が持ち上がる。とすれば實際に、女子を國家の利益に適うものにするには、女子にどのような教育を施せばよかったのだろうか。その試みの一つが所謂「良妻賢母」の養成を旨とする教育理念であった。他日人の母とならない女子はなく、母をもたない國民もまた一人として存在し得ない。人間は生まれた日から母の薫育を受け、又その感化の達するところは他の何人によるものよりも深い。いま存亡の危機に立つ中華民國を救うには優秀な國民を後ろ盾にするしかなく、優秀な國民は賢母からこそ生まれるのである。それ故、中國の將來にとって賢母を得ることは、鑛山を開發し實業を起すよりもはるかに根本的な問題となる。にもかかわらず、現實に目をやれば、將來賢母となるべき中國の女子學生は、おぼつかない狀況を呈していた。

現在一般の女子學生は僅かばかりの科學の教育を受け、歐米の上っ面をなぞっただけであるのに、聲高に「われ女性中の志士なり」というが、その品行を察すれば放蕩をむさぼるばかりで、國民はこれを見て睥睨している。<sup>(11)</sup>と、筆者は中國の女子學生をとらえて、表面では最新文化を聞きかじるものの、家政をみるのに必要な知識は何も身についていないことを指摘する。では、國家に必要な賢母とはどのような存在であれば良いのか。

賢母氏とは何か？ 道德があり、學問があり、家政管理力のある女性が賢母である。この三つのどの一つが缺けてもならない。ただ私のいう道德とは、我が國の舊俗が女子を組み壓えてきたことをいうのではない。言い換えるなら、眞の道德、眞の學問、眞の經濟觀念と言うべきものである。故にわが女學界は入學のときに必ず最も純正な宗旨を定

めてこそ、賢母を育てて己の責任と國民の希望に背かぬものにならう。<sup>(12)</sup>

今中國の女性が取るべき道は、男子と參政權を爭う歐米の女性をいたずらに模倣することではなく、賢母となって優秀な國民を育てることにある。家庭内で母親の務めに徹すという意味において、それは一見舊來の中國女性そのままの姿に映るが、内實は決してそうではない。賢母たることは、舊い大家族制度の中で夫に服従し、家の犠牲となることとは意味が違った。自分の知恵と能力で家庭を管理し子供を優秀な國民に育て上げ、國家に貢獻する義務を果たす存在でなければならぬ。これは、從來の禮敎の支配する中國で善しとされてきたものとは明らかに違ひ新しい女性像を示すものである。そして眞の道德、學問、家政管理能力をもつ新しい女性は、教育を受けることによって生まれるものと理解された。すなわち賢母は教育を通じて生まれるものであり、從來のように女性を無學のままに放置することは許されない。ただしそれは歐米の皮毛をかぶり、表面的に男女平等の觀念を煽る教育ではなく、「内を治める」のに必要な技術を教え込むものでなければならぬ。

「内治」の技術の習得を重視することは、女子に教育を施す必要を強調し女子教育推進の論を提示したのと同時に、その一方では教育における男女差を肯定することにもなった。梁華蘭「女子教育」(『新青年』第三卷第一號)は、國家發展のためには女子教育を無視することはできないという立場から、日本を手本に女性の社會的役割と女子教育について發言するものであるが、中國が近代國家となるためには女子教育を無視することはできず、女子に對しても男子と同様に教育すべきであり、男女平等に教育を受ける権利のあることを説く。但し筆者の言う教育上の男女平等とは、教育内容を男女同一にすることではなく、男女平等に人格を尊重されて教育を受け、男女學生にはそれぞれ適性に應じた教育を施すべきであり、徒に表面的に同一な教育を施すことの愚を説いている。男女の適性に應じた教育をという考えは、女子は將來女子特有の役割を果たすために、女子の役割に應じた教育を用意すべきであるという考えを導くことになる。日本の良妻賢母主義はこの理想を體現するものであり、中國も日本を模範として早急に良妻賢母育成のための教育を採用する必要が説



かれたのである。文中、

國家に力を效する道は多端で、政壇に登ることだけがその方法であるというのではない。女子は人類の母である。夫に相添い子を教え、家を維持して生きれば、その國家に貢獻するところは十二分に大きい。英國の婦人は家庭の瑣事を必ず自ら擔い、日本もまたしかりである。殊に中國の女性は、數千年の壓制によって服従がすでに第二の天性となつていたのであるから、これを利用すべきである。これに良好な教育を施せば、中國の女性は世界第一等の女子となるであらう。<sup>(13)</sup>

とあるように、筆者は近年中國は西洋式の男女平等の教育を模範とし日本を輕視するものが増加しているのを愚行とし、保證すべきは男女同等の教育權であつて、教育の内容については男女差を設け、女性は家庭内の役割に徹して間接的に國家に貢獻する道を取ることを求める。

これに對して、家庭内での役割に徹する母親或いは妻を、儒教の説く女性像と同質のものとして稱揚し、儒教體制維持のために利用しようとしたのは、民國初年の爲政者達であつた。その最たるものは、一九一七年に公布された修正褒揚條例の中に見とれる。<sup>(14)</sup> 修正褒揚條例は、中國の女性の理想像を傳統的な道德觀の中に搜し求め、禮教の教えに忠實な女性を顯彰することで社會規範の維持をはかうとしたものである。節婦烈婦と共に、「良妻賢母」を稱揚することが同條例に明記されたことにより、知識青年にとって「良妻賢母」は封建時代の遺物を象徵する言葉となつてしまつた。「良妻賢母」は褒揚條例の中で、傳統的な價值觀により、「節を貫いて生涯二夫にまみえなかつた節婦」並びに「身の潔癖を失うよりはと死を選んだ烈婦」と同列に稱揚されんとしたために、本來は國家に獻身するはずであつたものが、前時代の女性と同一視されることになつた。よつて修正褒揚條例に盛り込まれた「良妻賢母」は儒教主義の觀點から女性を稱揚するものであつて、近代的な國家觀に基づく女性像とは無縁な存在に變じたのである。その意味で、修正褒揚條例は良妻賢母主義が本來的に目指したものからは的外れな贊美を女性に與えるものであつた。さらに注意すべきことは、そこでは中國の

傳統的道德觀を維持するために良妻賢母が取り沙汰され、良妻賢母と不可分のものとして語られるべき中産階級の家庭そのもの、及び賢母と一對をなす中産階級家庭の男性について觸れられない點にある。<sup>(15)</sup>「良妻賢母」に儒教的な女性觀が盛り込まれたことによって、中産階級の男性資金給與所得者に最大の生産性を上げさせるために作り出された規範であったことは遠く忘れられてしまったのであった。

良妻賢母待望論の對極で、「良妻賢母」を男尊女卑の思想と封建的な家族制度を象徵する存在と見なし批判の對象とした一派も、中國に「良妻賢母」が紹介された直後から存在した。彼らは何故良妻賢母を拒否したのか。一九〇九年『女報』に載せられた陳以益「男尊女卑と賢妻良母」に、

賢母というものは、均しく男子に對していうものである。他人の母であり、他人の妻である、その名を飾って賢母といい良妻というが、實は男子の高等奴隸に過ぎない。<sup>(16)</sup>

と言うように、良妻賢母主義はその言葉どおり、女性が夫に柔順な良い妻、子供に對する賢い母となることだと解された。尙且つそれは直ちに、從來の男尊女卑の原則に基づく夫婦關係を想起させ、封建制度の再認識であると見なされて反發を招くことになったのである。

こうした風潮の中で、『新青年』においても良妻賢母を女子の人格を無視する政府のやり方に抗議を唱える意味で、良妻賢母という言葉を否定的な文脈で取り上げる例が増えてくる。<sup>(17)</sup>『新青年』第三卷第三號高素素「女子問題の大解決」では、良妻賢母は「良妻賢母の説は、日本で盛んに唱えられ、我が國でも近ごろややその趨勢が見て取れる。日本で女子を賤視する度合いは、我が國におけるよりも甚だしいことは、もとより怪しむに足りない」と、良妻賢母主義を日本からもたらされた害惡として排斥している。また華林「社會と女性解放問題」(『新青年』第五卷第二號)では、良妻賢母の語は「忠臣、孝子、賢妻良母などの規範は新教育の容れるところではない」と、舊道德の善しとした、君主に忠節を誓う家臣、親に孝行を盡くす子供と同列に、夫に逆らわない女性の意味で使われており、元來良妻賢母に課せられていた、自ら

の知恵と技術で家政を管理し子供を教育するという、新しい家庭婦人の役割の面は忘れ去られている。反對に「女子にも正當の職業があれば、男子もまた負擔の累はない」と女性を家庭から解放し、職業に従事させることが女性にとっても男性にとってもまた社會にとっても利益となることを強調し、女性が解放されず男性を頼って生活する身であり續けるなら、これが社會にとっていかに損失を招くかを説いた。

このように、修正褒揚條例に良妻賢母褒賞の項が盛り込まれたことが、良妻賢母批判を引き起こしたことは否めない。だが、良妻賢母に女性の理想像を見て女性の家庭内の役割を重視する考え方が完全に忘れ去られた譯ではない。『新青年』第三卷第三號の女子問題の欄には、右述の高素素「女子問題の大解決」と並んで、「中國女子の婚姻と育児問題を論ず」が掲載されているが、そこでは高素素の急進的な意見とは反對に、女子は良妻賢母となり育児を第一の任務とすることを善しとしている。また『新青年』第三卷第四號に吳虞の妻曾蘭の署名で掲載された「女權平議」は、女性が男性と同等の能力を有し、女性はけつして男性に従屬するいわれはないことを論じ、歐米の例を見ても女權が保證されるべきことは世界の逆らうことのできない趨勢であるとして、中國女性が進むべき道を示した後に續いて次のように述べた。

吾が女子は、その道徳を琢磨し、その學問を強化し、その能力を増進すべきであり、そうすることによって、その權利を享受する日を得ることを願う。男子とともに國家主義の中に奮闘し、今日の英獨の女性に續くのだ。もとより現在國家を顧みない政客議員とその損失を一朝に比べるものではない。ああ、良妻賢母はまことに女性の天職の一端ではあるが、今の世界に生きるならば、ことに良妻賢母を究極におくことはできない。<sup>(18)</sup>

ここには、家庭内の夫婦の平等を訴え、女性も男性と同等の權利をもつことを要求する一方で、男子と同等に國家の爲に奮闘すべきことを併記している。筆者にあっては自ら女性の權利を要求する一方で、男性と同様國民として、國家のために貢獻することが命題として意識されていた。單なる男尊女卑批判の立場から良妻賢母に反發したのではなく、國家にとつては今、良妻賢母ではなく、男性と共に多様な方面で奮闘する女性こそが求められていることを説いたのである。

明治初頭の日本で生まれた「良妻賢母」は中國に傳えられた後、このように様々な解釋を與えられた。だが結局、儒教の匂いを放つものは徹底的に排除されようとした時代にあつては、家事専従者である良妻賢母は中國の進歩的青年に受け入れられるものではなかった。日本においては壓倒的な家庭規範として他の追隨を許さなかった良妻賢母主義も、中國においては一個の「外來思想」の域を出なかったと言えよう。

## (二) 歐米型中流家庭への憧憬

民國初期に中國に輸入された家族觀は、日本の良妻賢母主義には止まらなかった。そもそも日本で良妻賢母と呼ばれる女性觀は日本に固有のものではない。一九世紀後半から近代國家建設の道に歩み始めた國々では、それぞれに自國の事情を含みながらも、總じて國家の基礎となる家庭を管理し、兒童の教育に對する責任を女性に求めた。とりわけ、この時期に知識青年を自負し、民主と科學の精神にならつて中國を近代國家に變えるべしと唱えた者達が、歐米型の家族觀に影響を受けないことはあり得なかった。特に雑誌『新青年』が登場し、衰退の病根たる儒教主義と進化の象徴である西歐文明という對比が明らかになると、儒教の傳統にのつた家庭規範を否定して歐米に倣つた家庭を營もうという意識が急速に強まつていった。専制主義の對極にある民主政治に理想を見た知識青年達は、民主主義の先進國である歐米の家族制度に魅了された。歐米諸國が富強をほしきままに享受しているのは、國家の基礎たる家庭が民主と平等の精神に基づいて成り立っているからであり、中國も歐米に伍していくためには時代遅れの家父長制による家族制度を打ち破らなければならないと見なされた。

では、民國初年の青年が模倣しようとした、歐米型の家庭とはいかなる内容を備えていただろうか。その基本となるのは、一九世紀末から二〇世紀のはじめの歐米諸國で、キリスト教の説く價值觀を背骨にしつつ新興産業に従事して經濟力をつけてきた都市中産階層の育んだ家庭觀であつた。<sup>(19)</sup>この時期に勃興してきた歐米都市の中産階層は、新しい技術に支え

られた生活を開始した。まず、次々に開發される、家事勞働簡便化のための器具が家事のやり方を一新してしまった。それと同時に都市における上下水道、電氣等が整備され、衛生環境が整ったことが子供の死亡率を低下させた。ここに中産階層の家庭では落ち着いて丁寧な育児教育を行うのを善しとする風潮が生まれた。それはやがて主婦に對して、複雑な家事をこなした家庭を清潔で潤いのある状態に保ち、家庭を教養、娛樂、安靜の場とする使命を與えることになった。最新の知識と技能によつて複雑な家事を賢くこなし、家庭のために獻身する主婦はこうして誕生した。

またその一方では、近代國家を築く條件として、國民に一律に基礎教育を受けさせる必要に迫られつつ女子教育が社會に定着していった。基礎教育に始まって高等な教育を受ける女性が増えると、女性は教會や學校の同窓組織が主催する慈善活動、文化活動等を通じて社會に出ていくことを知り、家庭の外へ目を開いていくことになった。そしてやがてその延長上に、賢い主婦として才能を發揮するだけではなく、社會的職業に就き賃金を得ることを望む女性が現れることになる。こうした、社會進出の意識に目覺め職業に従事して自立しようとする女性の前途を阻んだのは、法律の壁であった。法律が女性に參政權を認めず、女性は父親或いは夫に補助されるものである限り、女性が自分の意志によつて活動することは不可能であつた。自立を求める女性は、法律上の男女平等、參政權等の要求をはじめ、社會生活に必要なさまざまな權利獲得を目指して女權運動を起すことになる。そして、これらの中産知識女性の登場と同時に、都市には工場勞働に従事する女性が誕生し、數の上では中産知識女性をはるかに上回り、無視し得ない存在となりつつあつた。

『新青年』に集う青年知識層が歐米型の家庭模範に注目したのは、以上のように中産階層の女性が堅實に家政を擔當する重要性が認識される一方で、家庭外へ生活圏を廣げようと望む女性たちが法律上の男女平等を唱える運動を起こし、さらには勞働女性が働く權利を要求する聲が高まろうとする時代に相當した。一九一〇年代後半から二〇年代初頭の中國には、これらの歐米の家庭觀が次々と流入することになる。

歐米生まれの家庭觀が中國青年に對して福音となつたのは、まず第一に、子の婚姻に對する親の干涉の排除を願う中國

青年に力強い論據を與えたからであつた。婚姻に對する親の干涉がいかに不當で、まさに中國の腐敗の源であるといふことは、新文化運動の中で、繰返し唱えられた。吳虞の家族制度批判もこの婚姻に於ける親の決定權行使への反發から説かれてゐる。自由な戀愛による結婚を主張する知識青年等の中からは、また、自分の意志に反した結婚を強いられた不幸な事件に關して論及する形を借りて、封建的な婚姻制度に對する不滿を唱える風潮が現れた。湖南省長沙で自分の意志に反する婚姻を強いられた女性趙五貞が、婚家へ向かう籠の中で抗議の自殺を遂げた事件は、舊い婚姻制度のもたらした典型的な悲劇として取り上げられた。<sup>(20)</sup>新しい結婚を主張し儒教への反撥をあらわにした若者にとつて、禮教のいう家庭には、その門出から暗雲が立ち込めていた。彼らにとつては、「戀愛が結婚の第一要素であることは、毫も疑を差し挟むものではなく、逆に世間で取り沙汰されている結婚は金錢と肉欲、汚れと野心の野合」以外の何物でもなかつた。<sup>(21)</sup>

では次に、戀愛結婚を主張する青年にとつて、親の干涉を排し自由結婚によつて生み出した新しい家庭は、どのように營まれるものと理解されていただろうか。『新青年』第二卷第二號に載せられた李平「新青年の家庭」は、新しい家庭とはどのような場所であるべきかについて、讀者から寄せられた投書である。そこには古い家庭を否定した後、どのように家庭を築くのか、模索の第一歩を踏み出した様子がうかがえる。文章には、筆者が新しい家庭に必要と考えた事柄が全二十六條に箇條書きにされている。それらの項目の中から、家族構成及び家族員の相互關係にかかわるものを挙げると、以下のごとくである。

- ・ 家庭は一夫一婦及び未婚の子女だけで組織すべきである。
- ・ 男子は妾をおかず、女子は婢を蓄えない。
- ・ 親子の關係はもっぱら義務のために結ぶものであつて、權利のためにあるのではない。
- ・ 親は子供を物のようにみなして報酬を求めてはならない。
- ・ 親は子の婚姻に口出ししない。

・成年に達した兄弟は同居してはならず、財産は獨立すべし。

・婚姻は奢侈をいさめ、完全に子供の自由にまかせる。

彼らが營もうとする家庭は、近代西歐の中流家庭夫婦と未婚の子供から成り立ち、夫婦が未婚の子供を育てる場であつて子供が親に服従する場ではない。むしろその逆に子供を育てるのは親の義務であるという感覚がここには現れている。

子供は成人に達すれば獨立し、親は子の結婚には口出しはしてはならない。そして子供もまた親の財産を當てにして結婚することは許されない。この時期の家族制度批判の風潮の中では、子に對する親の専横に抗議する聲が大きく取り沙汰されたが、家族間の相互の依存心が家庭の墮落を招いているという指摘もまた同時に様々になされている。新しい家庭を模索する者にとっては、成人に達し、自ら家庭をもつ年齢になった子が親に依存することは許されず、堅く戒めなければならぬ行爲と見做された。

こうした親と子の關係を明らかにする一方で、筆者はまた直接家庭の切り盛りにかわる項目を列擧する。

・家庭の出納はひとしく主婦がにぎり、男子には干涉する權利はない。

・子女は必ず同等の教育を受ける。

・教育と衛生の二項には年間に大きく豫算をとる。

・主婦は雜役を助理し、使用人下僕を數多く雇つてはならない。

・子女は自立した人格をそなえ、親の遺産を當てにしてはならない。

・衣食住の三者には科學の方法を用い、務めて衛生及び經濟の原理に合わせるようにする。加えて子女には良好な習慣を養わせる。

・家庭は清潔を心掛け、父母は身をもつて手本となるように努力し、家庭教育の基礎とする。

・男子はつとめて直接生利の職業につき、群衆に益して生存に利すべし。

・女子は必ず醫學原理を學び、教育學をおさめ、出産は必ず醫院で行う。

・家宅は市場に遠く學校に近いところを選ぶのがよい。

右の各條を概観してみると、新文化運動時期の中國青年がいかなる家庭を理想としたか、その一典型が見て取れよう。まず、一見して分かるように、彼らは近代歐米の基督教プロテスタントに典型的な生活規範を模倣しようとした。これは民國期以降、歐米へ留學する者或いは教會經營の學校に進學する者が増加し、また中國におけるプロテスタント教會の宣教活動や、列強が租界に西歐式生活様式を持ち込んだ結果、その家庭様式に直に觸れる中國の知識青年が格段に増加した結果である。基督教の説く家庭觀は、本質的には儒教の説くところと同じく父權的家族主義を奉じ、女性には聰明で慈愛深く、家庭運営にすぐれた「クリスチャンワイフ、クリスチャンマザー」であることが期待されていた。<sup>(22)</sup>だが中國の女性にとっては少なくとも、大家族のしがらみから解放された核家族の中で、夫は安定した賃金を得られる仕事について勤勉に働き、妻は堅實に家政を切り盛りするという家庭形態は、新鮮な驚きと憧憬をもって迎え入れられた。夫と妻はそれぞれ對照的な役割をあてがわれているが、妻は夫に服従するのではなく、家政管理は妻の義務であるとともに夫に干渉されずに自らの意志によって擔うものとされており、さらに、夫も妻も他人に依存して家庭を營むことを諫められなければならない。すなわち一家の家計は夫の勞働による賃金で賄い親の財産を當てにしてはならなかったし、妻は家庭内の仕事を使用人任せにしてはならなかった。

次に、このような規範によって形成された家庭を、家政をまかされた堅實な主婦は、迷信や因習にとらわれず、合理的に切り盛りすることになる。右述資料の筆者にあっては、社會の改良は家庭の改良を抜きにしてはあり得ず、社會の良否は家庭の良否が左右するものと考えられている。そもそも何ゆえ家庭が大切か、その理由は、家庭が「國民の腐敗、青年の墮落はすべて劣惡な家庭で養われる」からであり、「家庭が不良なら社會國家も不良となるしかない。それどころか革新を謀るのに家庭を振り返らずこれを社會國家に求めて、どうして救済できようか」といふ點に見いだされたのである。<sup>(23)</sup>



國家の土臺となる家庭を改良するに當たつては、前述の各條から見取れることは、教育と衛生の二つの分野に對して最も力點が置かれたということである。筆者は家計の中でこの二つに特に大きな豫算を割き、子女を男女の區別なく同等の教育を受けさせることに注意を拂うべきものと認識している。ただしここに言う教育の主な部分は、高度な知識を得るために學校教育によつて施されるものであり、したがつて家庭は「子女の教育費を惜しまない、複數の子供に費やす教育費に差をつけない」ことを目指すものとなり、家庭内の教育機能は副次的な位置付けをされている。これに對して、「衛生」は、家庭生活そのものの中で實踐し、家庭内で行われる行爲であるという意味において、家庭との關係はより深いものとなる。なおかつ家政を主宰する主婦にとつても、衛生を維持するためにはより直接的に知識と實踐が必要となる。では主婦の仕事と衛生はどのような關係をもち、また衛生は具體的にどのように實踐するものと意識されたのだろうか。

まず、衣食住の管理は「科學の方法」を用いて行われなければならない。衛生的な生活は、迷信を排し科學の知識に準じてはじめて實踐し得る。科學と民主という『新青年』の掲げた二大テーマのひとつである「科學」の追求は、このような形でも中國青年の意識の中に浸透しようとしていた。家庭の主宰者たる主婦も、家庭を衛生的に保つのに必要な知識を學ばねばならない。知識を得るだけでなく實踐においては、生命の誕生から終焉まで、その生活は衛生的であることが賞かれなければならない。よつて出産は醫院で行い、死後は火葬を善しとすることになる。筆者にとつては、家庭は國家の富強の礎であり、科學知識に基づく衛生清潔な家庭を築くことこそが國家を救う道であると信じられた。

男女の性別役割、家庭經營のための科學的知識と衛生への關心、そして衛生的で迷信を排し科學の精神に満ちあふれた家庭こそ、近代國家に不可欠なものという認識は次のような記事にも現れている。すなわち、孫鳴琪「家庭の改良と國家の密接な關係」（『新青年』第三卷第四號）によれば、筆者は米國に遊學し親しく彼の地の家庭並びに夫と妻の關係を見聞したことを土臺に中國の家庭の問題を取り上げてゐる。筆者は國家の基礎は家庭にあり、家庭の良否が國家の盛衰を決定するという價值觀に基づき、中國の國力増強は家庭を改良せずには實現しないという理論に従つて、中國の家庭の改良すべ

き點をあげる。すなわち、家庭を有効に機能させ齊家治國の實を上げるためには、男女とも早婚を避けて、女子は結婚前に必ず就學し、科學を、その中でも家政と保育に關する最新の知識を身につけて、他日嫁して家庭の主婦となる日に備えること、また男子も學堂に入學し、各種の學科を學ぶとともに、「家庭の道」についてもあらかじめ心得をもつべきことを言う。そして結婚した後は、

男子は職業について家計を支えるとともに、衛生の學に通じ、國家の公益をおろそかにしてはならない。父母たるものは男兒には愛國齊家の道を教え、女兒には婦となり家を治める務めを教えなければならない。まず良好な家庭があつてはじめて強國が成立するのである。(中略)これを總じて言うなら、一切の家庭に關係ある問題は、すべて國度に關係する。國の強弱は家庭の良否を見て判斷の基準とする。故に端正の士は清潔で快樂な家庭を築いてこそはじめて社會に公益をはかることができ、齊家治國の道は息吹を相通じるのである。<sup>(24)</sup>

と、男女平等の精神に基づきながらも男女がそれぞれの役割を果たし、科學の精神、衛生の觀念に貫かれた家庭の理想が膨らんでいった。

衛生面から中國の家庭を改善するという計畫は、家庭改善運動を通じて都市民に普及させようと考えられるようになっていった。このことは、この時期に家庭改革運動を趣旨とする組織が續いて誕生したことから見てとれる。民國八年上海に生まれた家庭日新會はその典型を示す。家庭日新會はその名稱通り、舊習を克服し、家庭教育、家庭衛生を手初めに、<sup>(25)</sup>ついに婚姻及び家庭組織の改良を目指して始められた。會員には夫婦で入會する者が多くあつたという。

『申報』に載せられた記事によれば、同會では定期的に例會を持ち、婚姻並びに家庭生活における舊習の合理化、家事管理や育児の爲の新技術の紹介を會の目的とし、それらの活動の中で衛生に關する議題もしばしば取り上げられている。例えば、民國一〇年七月の例會では、會員四〇名の参加に加え、廣東教育參觀團の來訪を得て、傳染病の病原菌の増殖の原理及びワクチンの製造法の講義、歐米の地域人口、ドイツにおける國民體育並びに男女の婚姻等について演説がなさ

れ<sup>(26)</sup> 同じく民國一一年六月に開かれた講演會では、「兒童衛生」がテーマに選ばれている<sup>(27)</sup>。また民國一二年四月に開かれた同會の第四回年會では、雙十醫院院長の汪千仞が「喫飯問題」と題するテーマで、食器の共用を避けるべきこと等を主題に講演した<sup>(28)</sup>。

家庭日新會のほかにも、家庭の改良を目的として活動した團體としては、基督教女子青年會(YWCA)、上海婦女會等があげられる。基督教女子青年會は<sup>(29)</sup>、そもそもイギリスに本部を置き歐米各地に組織を廣めていたが、中國にも活動の場を廣めようと、早くも一八九〇年に、キリスト教會の女性團體としては中國で初めて杭州弘道女學校を開校している。その後一九〇五年にはYWCA中國委員會が成立、翌年に正式に中國YWCAが発足し、以後徐々に中國の主要都市に支部が設けられて活動の基礎が固まっていた。海外との連絡の中で組織作りを行ってきた中國YWCAは、一九二〇年代前半には中國の女性組織としては大きな存在に成長していた。

中國YWCAの設立當初の活動は、キリスト教精神の一般への普及活動と女性信者の懇親におかれ、現状の社會矛盾との對立は避け、現今の體制内で慈善的精神に基づく社會改良運動に従事することが會の趣旨とされていた。だが、キリスト教の説く精神に従って中國女性の生活を改善するという目標に沿って、同會では家庭改革のためのさまざまな催しを企画主催していた。中國YWCAでは一九二〇(民國九)年四月八日、上海に改革家庭委員會を発足させた。同委員會の目的は家庭の改良を議論し、實踐の方策を探ることにあり、上海社會における家庭の位置付けを考え、まず教會、病院、會社、學校が率先して啓蒙活動を行っていくこと、並びに家庭改革の要點を、家屋の清掃衛生、女性と兒童の衣服、家庭の改革、家庭財政等の分野に分けて討議していく方針が定められた<sup>(30)</sup>。このほかにも上海では、上海婦女會、米國のキリスト教ミッションが組織した中華婦女節制會などが類似の家庭改良活動を繰り廣げ、『申報』にも随時その模様が記載されている。

以上のような女性慈善團體の行方活動の他に、新聞紙上にも衛生觀念の啓蒙記事が取り上げられるようになる。ことに

一九二〇年（民國九年）六月一日『申報』に「常識」欄が創設された際に、「衛生」は法律、商務の知識と並んで、紙面の主要なテーマとなった。<sup>(31)</sup>「常識」欄の衛生の項には毎日、梅毒、インフルエンザ、チフス等流行病の豫防、公衆道德の心得、家屋、市街の清掃管理等、家庭もしくは個人レベルで可能な衛生活動の紹介がなされ、「衛生は強種強族の要」とうたわれた。

しかし衛生向上の啓蒙運動が盛んに行われるにつれて、却って現實を改善する技術力との乖離が明らかに浮かび上ることになった。例えば、衛生の維持に決定的な意味を持つ水道の普及と管理が遅々として進まなかったことを示す例として、一九二〇（民國九年）年上海で、上海内地自來水公司が使用に堪えない水質の汚濁を見過ごしたまま使用量の値上げをはかったことに對し、各方面から衛生上の疑念を訴える抗議を受けている。<sup>(32)</sup>家庭改善に携わった人々は啓蒙活動だけでは乗り切れない壁を見るしかなかった。生活改善を言う人々の關心は、衛生知識の普及に不可欠な家計經濟の安定に向かわざるを得なくなっていく。

こうした状況の中で、中國の中産知識青年はさらに新たな局面に立つことになる。それは賃金労働を土臺とする都市の生活形態が十分に成熟して彼らの理想を實現するだけの基盤が未だ打ち立てられずにいたことと、中産階級だけでなく労働者層の問題が無視できない存在であることを、彼らが自覺した時に始まった。五四運動を経た都市の青年層にとって、家庭のもつ意味は急變していく。一九二〇年代に入った中國で、女性と家庭、そして労働という要素はいかにかわることになるのだろうか。

## 二 女性の労働と新しい家庭像の模索

近代工業の成立によって家庭と職場が分離した結果、個人は職場か家庭かいずれか一方に比重を置いた生活を営むことを餘儀なくされた。中國における從來の家庭觀を越えて、都市の生活形態に適した家庭を築く上で、キーワードとなった

のはまさしく「勞働」であつた。よつて知識層の青年達も勞働によつて見込まれる固定した收入の中で堅實に生活する爲に、社會は無駄なく質朴な消費生活を奨励するとともに、勞働そのものを神聖な行爲と見做し始めた。新しい家庭像の形成は、勞働をいかに位置付けるかが要點となつていく。又、都市における勞働のありかたをめぐる、これまで社會的活動から遠ざけられてきた女性にも、新たな期待が掛けられることになる。

他方、下層階級の女性にとっては、勞働とは自らの生存に不可避の行爲であり、勞働するか否かを選択する餘地などあり得なかつた。また五四運動時期から一九二〇年代初頭にかけて、上海等では工場勞働に従事する女性勞働者數の増大という現象が見過ごせないまでに大きくなつていた。その結果中産階級の女性の中からも、それまで善しとされた家庭の存在意義を疑問視する者が現れ始めた。そうした説を唱えた人々は、家族制度を經濟構造と密接に關連づけ、封建的農業經濟に應じて形成されてきた家族制度は、工場勞働者の出現以後の社會では舊時代の遺物に過ぎないと宣告を下した。

『新青年』（第四卷第一號）に載せられた陶履恭「女子問題」は、社會構造の變化にともなつて女性問題が緊急に解決を要する重大事となりつつあることをうたったえるものであるが、そこには女性が直面する生活上の問題が社會における家庭の役割の變化に源を發していることが語られている。

昔の女性は育児、炊事、裁縫を唯一の天職としたが、今社會の經濟狀況が變質し、別に活動の方途を探るようになった。昔の女性は家庭を世界とし、學校とし、工場とし、ここに生まれ、ここに育ち、ここに教えを受け、ここに勞働し、ここに老い死して、碌々として生を終え、子孫を残すこと以外は、なすところはただ、家庭經濟の必要とするところを満足させるのみであつた。今日大工業が勃興し、物品はもはや家庭に産せず工場に産し、女性はもはや家庭で立ち働かず、外國人に雇われる<sup>(33)</sup>。

家庭がもつぱら消費の舞臺となれば、家庭を中心とする女性の生活も變化せざるを得ない。家庭を自らの領分とし、家事専従者の道を選択することが可能な中産階級の女性と異なり、自ら收入を得て家計を補うことを餘儀なくされる勞働階

層の女性は、生産労働の場でなくなった家庭にとどまることを許されなかった。このような状況をとらえて、李大釗もまた、中國が既に農業を基幹とする經濟構造を善しとした時代と告別する時を迎え、經濟構造の變化は取りも直さず思想の變動を導くことを説いた。一九二〇年「經濟上より中國近代思想變動の原因を解釋する」において李大釗は、

現在經濟上の壓迫により、大家族制度の本體がすでに維持できなくなってしまった。新しい經濟勢力に伴われて自由主義、個性主義もまた家庭の領土に突入してきた。大家族制度の崩壊破滅は逃れられない運命である。子弟が親尊長に向かって解放を要求するだけでなく、親尊長も子弟を解放しようとしつつある。女性が男性に向かって解放を要求するだけでなく、男性もまた女性を解放しようとし始めたのである。なぜなら經濟上の困難のために、家長も彼自身の負擔を軽減しようと、彼らが自ら活動し自立して生活することを認めるからである。從來の農業經濟時代は、彼らは一つの家庭の中に包括されるのを實に有益としたが、現在それは無益であるだけでなく、煩わしい足手まといである<sup>(34)</sup>とさえ見なしている。

と述べる。國家利益への貢獻という觀點から女性の生産活動への参加を肯定する説は、梁啓超等によって早くに唱えられていたが、<sup>(35)</sup>一九二〇年代を迎えようという時期の中國では、都市における大家族制の崩壊と女性労働者の出現は、經濟構造の變化に應じて生じた必然の事態と解された。ところが、女性が職場を得る機會は、劣悪な工場労働に従事する以外、ほとんど期待がもてなかった。職業技能の訓練を受けた経験もなく、職場も見つからない女性は袋小路に迷い込むしかない。かと言って家庭の中の主たる働き手の男性の賃金だけでは家計を支えることが難しい階層では、女性を家事に専従させ無収入のままにさせておく餘裕はなかった。

そこで一九二〇年前後には、各地で女性の職業訓練を目指して、職業學校設立の計畫が持ち上がる。一九一九（民國八年）に教育部が表した女子中學校に簡易職業科附設の建議書は、「我が國の女子は『分け前に預かる』のみだと世のそしりを受けるばかりだが、女子は分け前に預かるのに甘んじなければ他に適當な職業もなく、こうした事態を引き起こしてい

るのである」と述べているし、<sup>(36)</sup>また當時の女子職業教育の現状と課題を語る文には、「家事科（完備したものを指すなら）、交通科（郵電等）、新聞科、商業科、學校管理科、看護科、行政統計科等、設置學科の範圍を廣くしなければならぬ。以上の各科は現在ほとんど必要なさそうだが、しかし多くの社會的需要は、まず風潮を作り出すことから始まるのだ。社會的需要が生まれた時に供給する手立てがなければ、機會を逸することにならないだろうか」と述べられる。<sup>(37)</sup>これは、女性が現實に職を得ることがいかに困難であつたか、女性に開かれた職種が極めて限られていたことを示すものであり、まさに、都市における女性の賃金労働は緒にも就かない段階にあつた。中産階層の女性の就勞の機會がほとんど見當たらなかつた中で、都市下層階級の労働女性のみが急増したことは、労働條件の整備、女性労働者の救済等の課題を生み出し、中産階層の知識女性もこれらの問題の解決に關心を拂うべきこと、そして自らの生活から奢侈と怠惰を取り除き勤勉と節約の生活規範を打ち立てる必要が意識されることになっていく。以下にその様相を眺めてみたい。

一九二〇年代前期、中國の都市部では、知識人家庭においても、労働による賃金を得て家計を補う妻或いは母親を稱賛する氣分が生じようとしていた。生産機能を喪失し「職場」ではなくなつた家庭に留まることを許されず、新たに「工場」という職場に吸収されて行く労働女性が出現したことは、國家の細胞としての家庭經營に意義を見いだし、次いでは労働女性に先んじて女權運動を展開してきた中産知識階層の女性にも、意識の變革を促した。

既に述べてきたように、歐米式の核家族や日本の良妻賢母主義の描く家庭像に理想を求めた人々は、中國の家父長制大家族主義には反撥しながらも、家庭そのものについては、これを國家形成に必須の細胞と見なしていた。だが、都市部中産階層の女性の中からは、五四運動の經驗を契機に家庭の外へと活躍の場を廣げ、家庭外の役割を果たしたいという要求が既に芽生えた。女性も家庭に縛り附けられる必要はないという意識は、一九二二年、再び總統に就任した黎元洪が舊國會を召集、議會開催と憲法制定を宣言したことに刺激され、北京をはじめとする各地で女性參政運動を再燃させた。この運動によって女性は辛亥革命時期に試みて失敗に終わった女權運動をやり直し、參政權のほかに財産權、教育權を手

入れ、男性と同じ職業について同等の賃金を手にし、社會進出を果たすことを目指した。女權運動は當初、各地の女學校を據點とし、やがて各地區毎に女性の連合組織である女權運動同盟會（一九三三年六月<sup>(38)</sup>北京）、女權運動同盟會直隸支部（一九三二年一月<sup>(39)</sup>天津）、上海女權運動同盟會（一九三三年一月<sup>(40)</sup>上海）等が誕生していったが、結局は湖南、浙江の省議會等に若干の女性議員を送り込むことができた以外は、見るべき成果を挙げられず挫折を見た。

女權運動にかかわった知識女性は、勞働女性達と異なり、収入を得るためには是が非でも就勞しなければならない、という階層に屬していたわけでもなかった。女權運動は、相應の教育を受けた女性が、從來は女性には閉ざされていた活動でも男性と並んで同等にこなせるという自信に後押しされ、自分の能力に見合った職業につく權利をうったえた結果として始まった。だが、都市生活の中で、勞働代價を賃金で得るという収入形態に觸れ、誰がどれだけの収入を家庭にもたらすかが明らかになった時、知識女性は勞働と収入ということに注目せざるを得なくなった。収入の多寡が家庭内の支配關係を決定し、無収入の者は収入をもたらず者に従うしかなく、經濟的に自立せずして家庭内で獨立した人格を得るのは不可能という認識が、廣く行き渡ることになったからである。尙且つ、教育によって男女平等の思想及び歐米における女性の社會進出を進める姿に觸れる等、わずかに開いた戸の向こうに社會參加の可能性をかいま見たが故に、今回の女權運動の不振は、中産知識女性にお一層の閉塞感を加えた。

一方、女權運動にかかわった知識女性の傍らで、キリスト教團體に集う女性は勞働女性を支援する經驗をへて賃金勞働の現實と向き合うことになった。

女權運動が直接には勞働女性の運動を意識せずに進められていったのに對し、キリスト教會の團體に集った女性たちは一九二〇年代の初めに既に勞働女性との接點を見出し出していた。彼女らの運動は、一九二〇年代半ばまで、中國の下層女性に焦點を當てる唯一の活動であった。<sup>(41)</sup>キリスト教團體の中でも、慈善運動の傳統の上に苛酷な工場勞働に従事する貧困家庭の女性を支援する活動を率先して手掛けたのは、前述した中國YWCAである。YWCAは本來、體制との衝突を避



け、現體制の中で啓蒙活動、慈善活動を行うことを趣旨としていた。ところが一九二〇年代に入ると、このような會員の懇親と慈善運動を中心とする中國YWCAの性格に變化がきざし始めた。

一九二〇年四月に上海で開かれた中國YWCAの大會に來賓として出席した王正廷は、

我が國女性界は現在、①労働者、②家事にのみ従事するもの、③奢侈墮落に溺れる者の三つに區分できる。やや見識のあるものは、労働者を重視すべきことに氣がつき始めているが、これは誠に好ましい現象である。一般の奢侈に墮ち社會を損なう者が改悛につとめるべき事も、また言うまでもない。ただ愚直に家政に携わるだけの者も、やはり社會の公共事業に關心を拂うべきである。<sup>(42)</sup>

と述べた。都市部に於いて増加する女性労働者への支援の必要を認識しつつあった中國YWCAが具體的な活動に踏み出すに至ったきっかけは、一九二一年六月英國からYWCA労働幹事のアガサ・ハリソンを迎えた際に生まれた。ロンドン大學經濟學部の教授でもあったハリソンは來華後英國の労働問題とこれにたいするYWCAの取り組みを紹介し、中國においてもYWCAが率先して女性労働者の問題に取り組むべきことを説いた。このハリソンの働きかけに應じて、中國YWCAは同年一〇月に、スイス・ジュネーブで開かれた國際労働女性大會第二回代表大會に、中國代表として中國YWCA全國協會の出版擔當幹事であった程婉珍を派遣することになった。<sup>(43)</sup> 程婉珍は上海の中西女塾卒業後に米國に留學、歸國

してからは蘇州の景海女學での教員生活を経た後上海でYWCAの幹事を擔當、同時に『申報』の女性記者としても活躍する中で、中國で最も早く女性労働者に注目した者の一人だった。彼女は、渡歐後ジュネーブでの會議に出席したほかに、<sup>(44)</sup>英國に次いで米國でも女性労働者の状況を視察し、翌二二年の歸國後は自らが中心となって中國における女性労働者支援の活動に對して具體的な方法を模索し始めた。折しも同年春に上海日華紗廠でストライキが発生した際には、程婉珍は中國YWCAを率いて、ストを決行した女工支援に當たることになった。<sup>(45)</sup> これらの例は中國YWCAの労働者支援への意欲を示すとともに、労働する必要に迫られない階層の中にも、家庭内の役割にのみ携わる女性に對する評價に變化が起

ころうとしていたことを表す。

女性が家庭の外で収入を得ることを支持する風潮は、次のような資料にもうかがえる。すなわち、民國一二年八月一日の『申報』の「常識」家政欄には「余君の家庭」と題した記事が載せられているが、筆者の意圖するところは、同邑「余君」を彼の自宅に訪ね、その清貧を潔しとする生活ぶりを稱賛し、世の模範として紹介することにあつた。記事によれば余君は縣の勸學所所長に奉職する賃金生活者である。文中には、質素ながら清潔に整えられた住まいの様、端然とした暮らしぶりが紹介されるが、この余君の家庭を世の模範たらしめているのは、余君の夫人の存在であつた。こざっぱりとした藍染木綿の上下に身を包んで客である筆者を出迎え、笑みをたたえて上品に立ち振る舞う彼の夫人は、童僕一人を使つて家事を取り仕切るとともに、女子高等小學校の教員として月に二〇串を得て、毎月五〇串の給與を得る余君を助けて家計を支えていた。夫婦の収入七〇串は銀元に換算すると三五元に満たない。夫婦二人で子供がいなければ、どうにか明日の食費を憂えることなく暮らせる經濟狀態である。筆者は、このようなつましい家庭で夫の収入の低額な部分を妻が賃金労働によって補う様を理想としたのである。

主たる働き手である男性一人の収入で家族全員が生活するのはもはや無理という認識は社會に廣く浸透しようとしていた。民國一三年三月二〇日の『申報』には「理想の家庭」と題する記事が掲載された。そこには中流理想の衣食住について、華美を排し文雅な趣味と子女の教育を重んじ、生活衛生について留意すべき點を列擧するのであるが、その一節に、

男子も女子も同等の教育を受け、男子は成年に達すれば一業に執かない者はない。女子もまた、育兒に携わらず、家事を差配する譯でもなく、老齡でない者で一業に携わらない者はない。<sup>(47)</sup>

と書かれている。

女性も収入を得られる仕事につくべきという考えは理想の家庭を形作る要件に數えられた。民國一二年九月一日の『申

報』に掲載された「私見——女性は職業家庭を築くべし」もまた、既婚女性が就労する利点を数え上げて次のように記す。

《女性の人格を向上させる》

……略……

夫と子が破産或いは不幸にも夭折したとき、女性はおのれの生命力と志で獨立することができる。他人の牽制を受けず、寡婦となつても清廉で恥しい思いをすることもない。

《男子の負擔を軽減できる》

自分の力で食べていくことができ、食いぶちのことで他人を煩わさずに済む。

家に餘裕があれば日々益々發展し、女子のために食いつぶされるといふことがない。

一人の力では家計を支え難いときも、女子の勞働による所得で男子の不足を補うことができる。

《いかなる家庭にも適切》

大家族は人数は多いが、各人皆にそれぞれ収入があつて、懷具合に大差がなければ、日々親睦の情が増す。

小家庭は構成が單純なので、たちまち収入が増加し安定が保たれる。

《工業界最大の補助》

民衆の責任を男女が均しく擔う。舊禮教が未だ改められないうちは、（女子は）自室で工藝品の製造者となり、商品を出荷する。

……中略……

男子が発揮できない力を（女子が）發揮すれば、工業界に一異彩を放つに足る。

《兒童に勤勞精神を授けるのに有益》

男子は外を治め、女子は内を治めると言うが、胎教と母の教えを重んじれば、この説も今や覆りつつある。およそ祖父、父、伯叔は社會に服務し兒童の教導に當たる暇がない。母及び姉が仕事をしつつ兒童に學ばせれば、工業の製造には必ず常識、秩序、知恵と力の運用が必要なことを、兒童は知らず知らずのうちに身につける<sup>(48)</sup>。

舊い家庭制の否定後、新しい家庭像を模索して來た中國青年の、一つの歸着點がここに見える。女性に収入があれば、男性の負擔を軽減し、家計を補うという意義に加えて、女性の就勞がいかに價值があるかという點が多方面から強調されるが、これは本來家庭内の役割に徹し得る階層の女性にも就勞を促し、夫を助け國家に貢獻する美德を説くものである。

日本型良妻賢母やクリスチャンマザー・ワイフを受容するに至らなかった中國では、中産知識女性が勞働女性に近づいた時に、ようやくより幅廣い階層の規範となる家庭像の誕生にたどり着いた。座食する女性を家庭の負擔と感じる中産階級の不安定さは、彼らを上昇志向の努力目標や憧憬の對象にはさせなかった。民國時代の教育家俞子夷は當時、

中等程度の家は、職業界で生計をはかる。彼らの境遇は勞働者よりは些か備えがあるというものの、あれやこれや、入ってくる分だけ出費もかかる。社會ではいつの世も、長褂を着るような身分の者は長衫黨としての附き合いを缺かず譯にもいかない。それゆえ生涯苦勞するのは勞働者と同じである。幸運にも寒さと飢えは免れてもである。たとえ謹直に勤め、中年以降僅かな蓄えを得られたとしても、自分の老後或いは死後の體裁をなんとか格好をつけられるだけだ。<sup>(49)</sup>

と述べる。このように、中産階級そのものが、自らの存在基盤に安定を見いだせなければ、中産知識女性も「上等女性に比べて」これが中等女性の生活となるとこれがうってかわって不安定になる。彼女らはもっぱら結婚によって生計をはかる陳腐な方法に頼ろうとしても、これが頼りにならない。このため彼女らはしばしば家庭を離れて社會に出で何かの職業に就き、生活の糧を求めざるを得ない<sup>(50)</sup>」と言われるような存在となるしかなかったのである。

## おわりに

新文化運動時期から一九二〇年代半ばにかけて、中國知識青年が、どのような家庭觀を持とうとしたのか、本稿ではその軌跡をたどってきた。強固な傳統的な家庭制度の中に生きてきた彼らが、新しい價值觀を育むのは容易ではなく、彼らは矢継ぎ早に價值觀の變化に見舞われ、試行錯誤の中に様々な家庭論と對峙することになった。彼らは當初、日本並びに歐米の家庭を模範として新たな家庭觀の形成を目指すところから出發した。夫が一家を支えられるだけの賃金を得て、妻が使用人を置かず家事を自分でこなす核家族が、一つの理想と見えた。だが、これらを受容するには、ごく一部の階層の者にしか條件が整わなかった。現實には父親または夫の収入だけで家族全員の生活を保證できる家庭はごく僅かしか存在しなかった。多くの成年男子は、妻も勞働による賃金を得て家計を助け、家族を男性一人で支える負擔から解放されることを求めた。特に五四運動を経て中國がおかれている狀況に認識を新たにした知識階層の中には、彼らが決して確固とした基盤の上に生活している譯ではないという不安感が浸透していった。一九二〇年代半ばまでに、知識青年の理想とする家庭には勞働による賃金収入の確保という側面が、男女雙方の側から重要視されることになり、知識人家庭のイメージそのものも、勞働階層の家庭に接近し始める。中産階層の女性に對しては、生活上の奢侈を戒め、儉約を説く啓蒙的活動が試みられ、次いでは生産性を持たない女性が座食して咎められるのを避けるべく、勞働に携わり、家計を補うことの美德が説かれた。

また、知識女性の賃金勞働は、現實に家計を補助するという目的に加えて、彼女らにとっては是が非でも實現しなければならぬ意味合いを持っていた。即ち自ら収入を得られないことは、直ちに夫への經濟的從屬を想起させ、家庭内の女性の立場を危うくするものと受け止められたのである。中國に於ける賃金勞働時代の幕開けは、誰がどれだけの収入を家庭にもたらししているのかという事實を、衆目の前に公然と見せしめ、中國の傳統的な家庭觀の崩壊は、収入面から個人を

浮き彫りにしてみせる効果を發揮した。この現象に中國の男女は鋭く反應した。家族員それぞれの収入の有無は、家庭内の支配關係を決定する要因と見なされたのである。

また、同じ中産知識女性の中でも、近代以降キリスト教女性團體等を核として、家庭改善運動及び慈善活動に携わってきた人々も、一九二〇年代半ば頃には、これらの活動によって社會變革を實現するという活動の限界を感じつつあった。尙且つ中國におけるこれらの中産知識人の家庭生活は歐米や日本の中産家庭で理想となっていたように、複雑な家事をこなすために女性が家事専従者となるのを善しとする状況を生み出してはなかった。活路を見いだせない知識女性の中からは、やがて労働女性を支援することこそ自分たちの使命と見なし、労働女性を中心とする女性運動を推進する道を選ぶ者が出てくる。このように家庭に對する意識が變容していく中で、中國の女性は中産知識層が労働階層かを問わず、賃金労働ということを抜きにして考えることはできなくなっていた。中産階級の理想を具體化した家庭像が豊かに語られる時代は過ぎ去り、そうした家庭の擔い手である「良妻賢母」、「クリスチャンワイフ・マザー」もまた、居場所を失っていたのである。

以上のように、一九二〇年前後の中國知識青年がいかなる家庭觀を育もうとしたかについて、考察を試みたが、ここに確かめられたことはごく僅かである。現實の家庭がどのような性質をたたえた空間であったのか、また家庭の中の個人という側面及び夫妻、親子等家族員相互の關係については考察が及ばなかった。今後の課題としたい。

## 註

- (1) 女士汪毓貞「論婚姻自由的關係」(中華全國婦女聯合會婦女運動歷史研究室編『中國婦女運動歷史資料(一八四〇)〜一九一八』一九九一年 中國婦女出版社 二五七頁)。
- 時論選集』第三卷 生活・讀書・新知三聯書店 一九七七年 八三八頁)筆者は從來の婚姻制度の弊害として、早婚、賣

- (2) 履夷「婚姻改良論」(張枏・王忍之編『辛亥革命前十年間

買婚、婚姻の決定權を父母が握っていること、の三點をあげる。

(3) 「家庭與教育」(『天義』第一一、一二卷合刊初出 一九〇七年、前掲『中國婦女運動歷史資料(一八四九—一九二八)』二六五頁)。

(4) 漢一「毀家論」(『天義報』第四期 張枏・王忍之編『辛亥革命前十年間時論選集』第二卷 生活・讀書・新知三聯書店 一九七七年 九一六頁)。

(5) 小野和子「五四時期家族論の背景」(京都大學人文科學研究所共同研究報告『五四運動の研究』第五函一五 同朋舎 一九九二年)。

(6) 新文化運動時期には「民主と科學」の知識がさまざまに中國に紹介されていったが、家庭論の分野では坂元ひろ子氏の研究によって、潘光旦、魯迅兄弟等が中國における優生學の普及に務め、これが儒教主義的父權制度を攻撃する武器となっていたことを檢證している。坂元ひろ子「戀愛神聖と民族改良の「科學」—五四新文化ディスコースとしての優生思想」(『思想』第八九四號 一九九八年) 参照。

(7) 清末から民國時期の中國の家庭制度に關する研究としては、既に鄧偉志『近代中國家庭的變革』(上海人民出版社 一九九四年)、陳蘊茜「論民國時期城市家庭制度的變遷」(『近代史研究』一九九七—二〇〇〇)、周敏琪「一九一〇—一九二〇年代都會新婦女生活風貌—以『婦女雜誌』爲分析實例」(國立臺灣大學文史叢刊之一〇〇 民國八十五年六月)、張玉法「新文化運動時期對中國家庭問題的討論、一九一五—一九二三」(中央研究院近代史研究所編『近世家族與政治比較歷史論文集』 民國八一年)等がある。

(8) 清末の改革運動の中で女性の役割と生活に直接關係をもつものは、女子の學校教育發足の試みであろう。一九〇七年、學部は「各國の制度を参照し」て「女子小學堂章程」並びに「女子師範學堂章程」を奏定したが、實際には、その内容から見て日本の制度を雛型にしていた。「學部奏詳議女子師範學堂及女子小學堂章程并章程」については『大清法規大全』教育部卷九「女子學堂」参照。

(9) 日本の良妻賢母主義に關する研究としては、以下のものを参照した。小山壽子『良妻賢母という規範』(勁草書房 一九九一年)、片山清一「近代日本の女子教育」(建帛社 昭和五九年)、中島邦「女子教育の體制化—良妻賢母主義教育の成立とその評價」(講座 日本教育史(第三卷) 近代Ⅱ／近代Ⅲ)第五章 昭和五九年)、日本國立教育研究所編集『日本近代教育百年史』(第三—五卷(學校教育一—三) 一九七四年)より女子教育に關する部分。

(10) 中國における日本の良妻賢母思想の受容については、瀨地山角・木原葉子「東アジアにおける良妻賢母主義—近代社會のプロジェクトとして」(東大中國學會『中國文化と社會』第四號 一九八九年)、瀨地山角「東アジアの家父長制 ジュンダーの比較社會學」(勁草書房 一九九六年)、姚毅「中國における賢妻良母言説と女性觀の形成」(『論集中國女性史』 吉川弘文館 一九九九年) 参照。姚毅論文は、中國では日本から取り入れた「良妻賢母思想」を土臺に「賢妻良母思想」が成立した經緯を述べて、「賢妻良母思想」が儒教の女性觀と違つて近代的特徴を持つこと、しかし日本の良妻賢

- 母思想が男女の分業による生産効率の追求に根差しているのと異なり、中國の賢妻良母思想はより深く民族危機或いは愛國精神と結合していることを論じている。瀨地山・木原、姚論文から理解できるように、中國では日本から「良妻賢母主義」が持ち込まれた後、術語の用法に統一を缺いた。初期段階では特に日本の文獻を引用した場合等に「良妻賢母」或いは「良妻」「賢母」の語をそのまま用いる場合と、以後中國で通用していくことになる「賢妻良母」及び「賢妻」「良母」等が併用された。ただ「賢妻良母」という術語の成立過程については未だ確定できていない。姚論文では「賢妻良母」が中國における近代的女性像を表す言葉として用いられていないが、本稿では、術語の成立の問題を直接に論じるものではないので、引用した資料に用いられているところに従って、適宜「良妻賢母」或いは「賢妻良母」等の語を用いた。
- (11) 陳錢愛琛「賢母氏與中國前途之關係」(『新青年』 第二卷第六號)。
- (12) 同右。
- (13) 梁華蘭「女子教育」(『新青年』 第三卷第一號)。
- (14) 袁世凱の褒揚條例及び修正褒揚條例については、小野前掲論文五四・五五、六三・六四頁参照。
- (15) 前掲姚論文(一二五・六頁)には、日本の良妻賢母が工業化社會における効率の追求を背景に成立したのに對し、中國の賢妻良母は愛國を前提に登場したために、女性の社會參加の道を封じる力が相對的に弱かったことを述べている。これは裏を返せば、效率的な工業生産を追求する條件が未だ整わ
- なかった中國では、日本の「良妻賢母」の中から、男性賃金給與所得者と一對の存在としての側面を切り落とし、中國の事情に適應する部分だけを採用した結果であるともいえる。
- (16) 陳以益「男尊女卑與賢妻良母」(一九〇九年『女報』 前掲『辛亥革命前十年間時論選集』 第三卷四八二頁所收 生・讀書・新知三聯書店 一九七七年)。
- (17) 前掲小野論文参照。
- (18) 『新青年』が企畫した「女子問題」欄に女性讀者から最初に寄せられ、『新青年』第三卷第四號に吳虞の妻曾蘭の署名で掲載された革新的な投書「女權平議」の執筆と、吳虞・曾蘭夫妻の關係については前掲小野和子論文を参照。
- (19) 産業革命以後、次第に力をつけてきた中産階級の家庭については以下を参照。
- ジャン・ラボー著・加藤康子譯『フェミーズムの歴史』(新評社 一九八七年)、サラエヴアンス著・小檜山ルイ他譯『アメリカの女性の歴史』(明石書店 一九九七年)、「近代的女性——一九二〇年代のアメリカン・スタイル」(G・デュビイ、M・ペロー監修『女の歴史V』 第2章 藤原書店 一九九八年 一三二・一五五頁)。
- (20) 陶毅「關於趙女士自刎以後的言論」(一)(中華全國婦女聯合會婦女運動歷史研究室編『五四時期婦女問題文選』 生活・讀書・新知三聯書店 一九八一年) 二〇二頁、仲明「關於趙女士自刎以後的言論」(二)(同上) 二〇四頁。
- (21) 『新青年』第三卷第三號、高素素「女子問題之大解決」。
- (22) 末次玲子「中國における父權家族改革とキリスト教」(一九



二二一九四九年)」「(中國女性史研究)第5號 一九九四年)四頁。基督教の家庭觀は、本質的には儒教の説くところと同じく父權的家族主義を奉じるという共通點を持っていた。

(23) 李平「新青年の家庭」(『新青年』第二卷第二號)。

(24) 孫鳴琪「改良家庭與國家有密接之關係」(『新青年』第三卷第四號)。

(25) 談社英「中國婦女運動史」一六〇頁。

(26) 『申報』民國一〇年七月一日。

(27) 『申報』民國一一年六月二六日。

(28) 『申報』民國一二年四月三〇日。

(29) 中國におけるYWCAの活動については前掲末次論文二〇〜二二頁等參照。

(30) 『申報』民國九年三月二日、四月七、九日。

(31) 『申報』民國九年六月一日「常識」欄。

(32) 『申報』民國九年一月一日、一二日、同年四月九日。一九二〇年代までの上海の水道事情については、丁日初主編『上海近代經濟史』(第二卷 一八九五—一九二七 上海人民出版社 一九九七年)三七四〜七六頁參照。

(33) 陶履恭「女子問題」(『新青年』第四卷第一號)。

(34) 李大釗「由經濟上解釋中國近代思想變動的原因」(一九二〇年『新青年』第七卷二號)、中華全國婦女聯合會婦女運動歷史研究室編『五四時期婦女問題文選』(一四八頁 生活・讀書・新知三聯書店 一九八一年)所收。

(35) 梁啓超「女學」(『飲水室集』)。

(36) 『教育公報』第六年第七號「教育部咨各省區爲女子中學校可附設簡易職業科文」(瑤鑫圭・童富勇・張守智編『中國近代教育史資料匯編 實業教育師範教育』卷 上海教育出版社 一九九四年 一九九頁)所收。

(37) 楊鄂聯「中國女子職業教育之經過及現況」(『教育與職業』一九二二年四月三〇日 第三五期 前掲『中國近代教育史資料匯編 實業教育師範教育』卷 三九四頁)。

(38) 「北京女權運動同盟會宣言」(中華全國婦女聯合會婦女運動歷史研究室編『中國婦女運動歷史資料 一九二一—一九二七』人民出版社 一九八六年刊 五八頁)。

(39) 「上海女權運動同盟會請願書」(同右六三頁)。

(40) 中國の女權運動については、中華全國婦女連合會編著、中國女性史研究會編譯『中國女性運動史 一九一九—一九四九』(論創社 一九九五年)一〇八—一二七頁參照。

(41) 當時發足したばかりの中國共產黨の婦人部部長であった向警予が上海の女性労働者のストが失敗した後に書いた「中國最近の女性運動」では、労働女性の運動、女權運動及び参政運動と並べて、キリスト教團體が主催する運動に言及し、キリスト教團體は當時の中國で、労働女性支援に對し唯一有效な活動を行っていると記述している。(一九二三年向警予「中國最近の女性運動」(中華全國婦女聯合會婦女運動歷史研究室編『中國婦女運動歷史資料』(一九二一—一九二七) 一九八六年刊) 八六頁)。

(42) 『申報』民國九年四月十七日 上海で開かれたYWCAの大會に來賓として出席した王正廷の談話。

(43) 『申報』民國一〇年六月八日「女青年會社會服務部歡迎會」。

(44) 程婉珍の國際女子勞働會大會への派遣については、『申報』民國一〇年七月二〇日「國際女子勞働會之中國代表」、民國一〇年十二月一〇日「萬國婦女勞働大會消息」、民國一一年一月二〇日「程婉珍女士之遊歐譚」等参照。

(45) 『申報』民國一一年五月二十四日「日華紗廠罷工四誌」、五月二十八日「日華紗廠罷工八誌」。程婉珍の指導した一九二二年春上海における女工スト、及びその後の五三〇運動に至る一連の経緯に関しては佐藤明子「五・三十運動における中國婦人」(『史海』二七號 一九八〇年) 参照。また女性工場労働者については、小野和子「舊中國における『女工哀史』」(京都大學人文科學研究所『東方學報』京都第五〇冊 昭和

五二年)、同『中國女性史 太平天國から現代まで』(平凡社選書六一 一九七八年) 第六章「めざめる女工たち」参照。

(46) 『申報』民國一二年八月一日(「常識」家政欄)「余君之家庭」。

(47) 『申報』民國一三年三月二〇日「常識」家政欄「理想的家庭」。

(48) 『申報』民國一二年九月一日(「常識」家政欄)「婦女應組織職業家庭之我見」。

(49) 俞子夷「生活的兩方面」(『生活』第一卷二七號 民國一五年 生活週刊社刊所收)。

(50) 一九二二年一月王會悟「中國婦女運動的新趨向」(中華全國婦女聯合會婦女運動歷史研究室編『中國婦女運動歷史資料』(一九二一～二七) 三一頁～三四頁)。

versions of the *Shuo mo*, the Manchu edition is the most faithful to the original sources. In second half of this article, I employ the Manchu text of the *Shuo mo* to examine the relationships of the Qing, Oyrat (dGa' ldan), Qalq-a, and Tibet in the second half of the 17th century. As a result, it has become clear that the parties involved relied on the conception of Buddhist government, *doro shajin* in Manchu, entailing a "politics based on the teaching of the Dalai Lama" before acting in various cases, such as when the Kuriyen belciger meeting was held to bring peace to the Qalq-a and Oyrat in 1686, when an incident arose as the Qalq-a high priest rJe-btsun dam-pa was attacked by dGa' ldan of the Oyrat there, when there were negotiations between dGa' ldan and emperor Kangxi 康熙 regarding rJe-btsun dam-pa's flight to Qing, when the negotiations broke down and Qing and dGa' ldan went to war, and when the two sides made peace. This amounts to further evidence to support this author's previously stated position that the "Tibetans, Mongolians, and Manchus shared a realm that may best be termed the world of Tibetan Buddhism in the 17th century".

**THE VOICES OF YOUNG INTELLECTUALS CONCERNING  
THE IMAGE OF THE FAMILY IN THE EARLY  
REPUBLICAN PERIOD: FOCUSING ON THE XIN  
QINGNIAN 新青年 AND SHENBAO 申報**

NISHIKAWA Mako

Around the decade of the 1920s, the struggle to establish the image of the family was a pressing issue for the youthful intelligentsia of urban China. They first chose the image of the family that was expounded in the Japanese "ideology of good wife and wise mother" 良妻賢母主義 as their model. This was due to the fact that Japan had taken the lead on the path to industrial development at the time, and it was thought copying Japan would be most efficacious. However, this image of the family, very similar at first glance to that advocated by Confucianism, had in the end to be rejected by progressive youth.

At first the modern Western, Protestant model of the family also

seemed to serve as an attractive model for the youthful intelligentsia of China. The family, composed of a nuclear family freed from the bonds of the extended family, with a husband working industriously at a job, which provided a steady income, and the wife firmly managing the household, was accepted with enthusiasm. However, those who actually established such families were but an extreme minority; the vast majority expected that the wife too would find work and bring home an income.

The dawning of the age of wage-labor in China made the reality of just who brought how much income into the household clear to one and all. Chinese men and women reacted sharply to this phenomenon. The income or the lack thereof provided by each family member was seen as the determiner of family authority.

Only when middle-class women approached working women in a China that had been unable to accept either the Japanese-constructed image of good wife and wise mother or the Christian image of the mother and wife was an image of the family based on norms of a broader social class born. It was in this fashion that by the second half of the decade of the twenties, both men and women had come to value the notion of securing an income through wage labor as part of the image of the ideal family of the youthful intelligentsia, and the influence of the working-class households deeply imbued the image of the family of the intellectuals.

**ON THE PROCESS OF CREATING A HISTORY DURING  
THE MAMLŪK PERIOD IN THE LATE-FIFTEENTH  
CENTURY—THROUGH AN EXAMINATION OF ‘ABD  
AL-BĀSIT AL-ḤANAFĪ’S DESCRIPTION OF THE  
YEAR 848 A.H. (APRIL 20, 1444 TO APRIL 8, 1445 C.E.)**

KIKUCHI Tadayoshi

Many historians appeared during the later Mamlūk period and they have left us various works. However, critical evaluations of these works and a consideration of the interrelationship of the works has not been clarified to this point due in part to limitations on access to sources.